現代の青年層の「恋人」と「異性の友人」

研究開発室　宮木 由貴子

ー要旨ー

① 携帯電話やメールの普及で、「つながり方」の変化が指摘されてきた現代の青年層に対し、「異性の友人」を中心に異性とのつきあいについて、アンケート調査を実施した。その結果、異性の友人については、男性より女性で、年齢層別には中期青年層で、また既婚者より未婚者で「いる」とした人が多かった。

② 異性の友人の種類としては、「時々あっておしゃべりする異性の友人」と「電子メールで時々連絡をとりあう異性の友人」が同程度で最も多かった。また、「同性の友人とまったく同じで、恋愛対象としてみていない異性の友人」については64.0%がいるとしており、６割以上に恋愛対象から外れた「異性の友人」がいることがわかった。

③ 自分にとって異性の友人が「絶対に必要」と感じている人は19.9%で、「いたほうがよい」を合わせると６割以上が「必要」と考えている。一方、恋人や配偶者にとっての異性の友人については、「絶対に必要」(9.6%) と「いたほうがよい」(23.8%)を合わせても「必要」と考えている人は３割程度にとどまっていた。

1. 研究の目的と調査の概要

(1)研究の背景と目的

携帯電話の普及と多様化は、通信コミュニケーションのあり方を大きく変えただけでなく、人間関係のあり方そのものにまで大きな影響を及ぼした。これまでの研究では、メールが親密な関係・非親密な関係を問わず幅広く利用され、コミュニケーションの量そのものも増大させている点（宮木 2002）や、異性間でメールを使うことで関係構築・維持における“Ｓ・Ｏ・Ｓ”（Step up / Overlap / Secret）の効果、すなわち「関係発展しやすく」「関係維持しやすい」が「不信感のリスクがある」がある点（宮木 2007）について言及した。また、メールの普及により、恋愛感情のない、いわゆる「異性の友人」との関係が維持しやすくなった点も明らかになった。

こうした動きの一方で、現代の青年層は異性と出会う機会がない、異性と付き合うきっかけがないという声も多々聞かれる。実際、未婚化・晩婚化への対策として若者の出会いの場づくりをプロデュースする自治体や企業が増えている。こども未来財団

の2003～04年の調査によれば、何らかの結婚支援事業を行っている自治体は全自治体の半数を占め、特に出会い事業として「パーティ・スポーツ・レクや旅行等『レジャー型』出会い事業を行っている」としたのは、人口１万人以上の自治体で２割強、１万人未満で３割弱を占めている。民間の結婚情報サービス産業も拡大してきた。

こうした中、現代の青年層は恋人や友人も含めた「異性」とどのようにして出会っているのだろうか。またメールの普及により維持しやすくなったとされる「異性の友人」はどの程度必要とされているのだろうか。これらの点について、アンケート調査を実施した。

(2)調査の概要

アンケート調査の概要と回答者の基本的な属性は図表１・２のとおりである。

図表1　調査概要

調査地域と対象	全国の16～29歳の男女
サンプル数	900名
サンプル抽出法	第一生命経済研究所生活調査モニターとその家族協力
調査方法	質問紙郵送調査法
実施時期	2006年８月
有効回収数（率）	710名（78.8%）

図表2　回答者の属性

（単位:人）

		年齢層別			合計
		前期青年層（16～19歳）	中期青年層（20～24歳）	後期青年層（25～29歳）	
性別	男性	74（10.4%）	82（11.5%）	72（10.1%）	228（32.1%）
	女性	113（15.9%）	164（23.1%）	205（28.9%）	482（67.9%）
合計		187（26.3%）	246（34.6%）	277（39.0%）	710(100.0%)

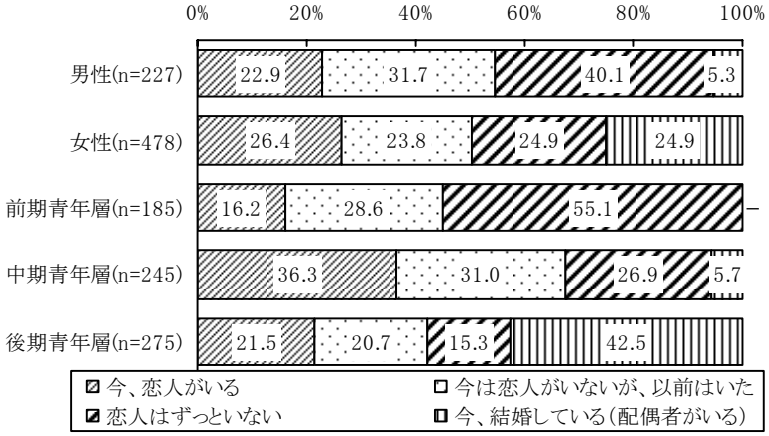
2. 異性関係の実態

(1)恋人

1)恋人の有無

「今、恋人がいる」と回答した人は25.1%と、全体の約４分の１だった。現在結婚していると回答した人は18.5%、「恋人はずっといない」という人は29.6%となっていた（図表省略）。性別にみると、男性では結婚している人が少なく（5.3%）、「恋人はずっといない」（40.1%）、「今は恋人がいないが、以前はいた」（31.7%）という人が多かった（図表３）。年齢層別にみると、前期青年層で「恋人はずっといない」が、中期青年層で「今、恋人がいる」が、後期青年層で「今、結婚している」がそれぞれ最も多くなっており、ライフステージに応じた変化が如実にあらわれた。

図表3　恋人の有無

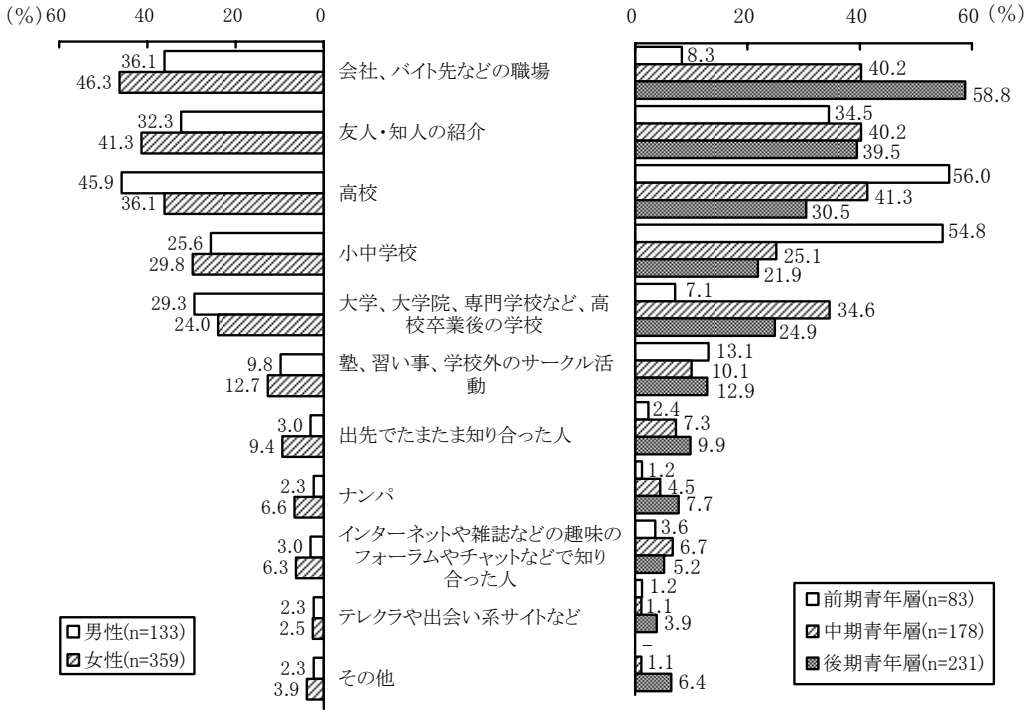


注：無回答を除く

2）恋人と知り合った場所

続いて、「恋人はずっといない」という人を除いて、恋人と知り合った場所をあげてもらい、性・年齢層別にみた（図表４）。性別にみると、女性において男性より「会社、バイト先などの職場」「友人・知人の紹介」が多いのに対して、男性では「高校」や「大学、大学院、専門学校など、高校卒業後の学校」が多かった。年齢層別にみると、「会

図表4　恋人と知り合った場所（性・年齢層別）＜複数回答＞



注：「恋人はずっといない」という人を除く

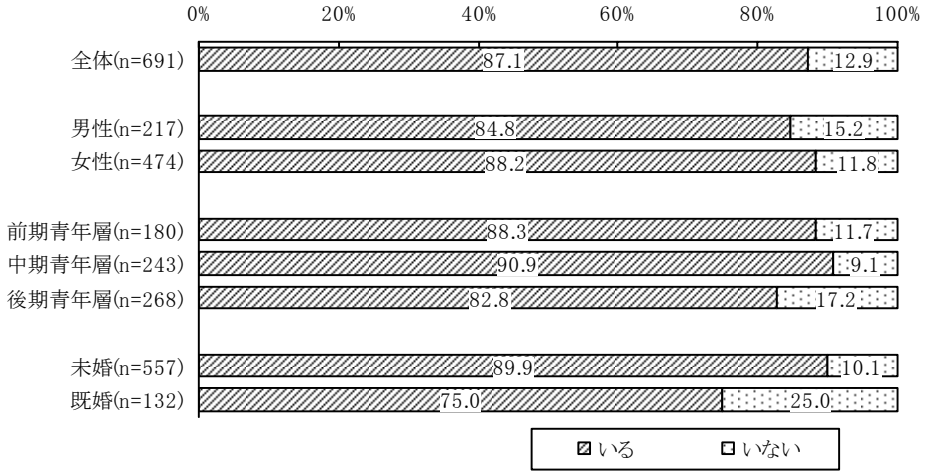
社、バイト先などの職場」は後期青年層で最多であるのに対し、中期青年層では「大学、大学院、専門学校など、高校卒業後の学校」が多く、「高校」や「小中学校」については前期青年層が最多となるなど、直近のライフステージが影響していた。

(2)異性の友人

1)異性の友人の人数

一方で、今日の青年層の「異性の友人」関係をみたところ、全体の87.1%が「いる」とした（図表５）。男性より女性で多く、年齢層別には中期青年層で最も多い。未既婚別に比較すると、既婚では未婚より低いものの、それでも75%に異性の友人がいることが明らかとなった。

図表5 異性の友人の有無



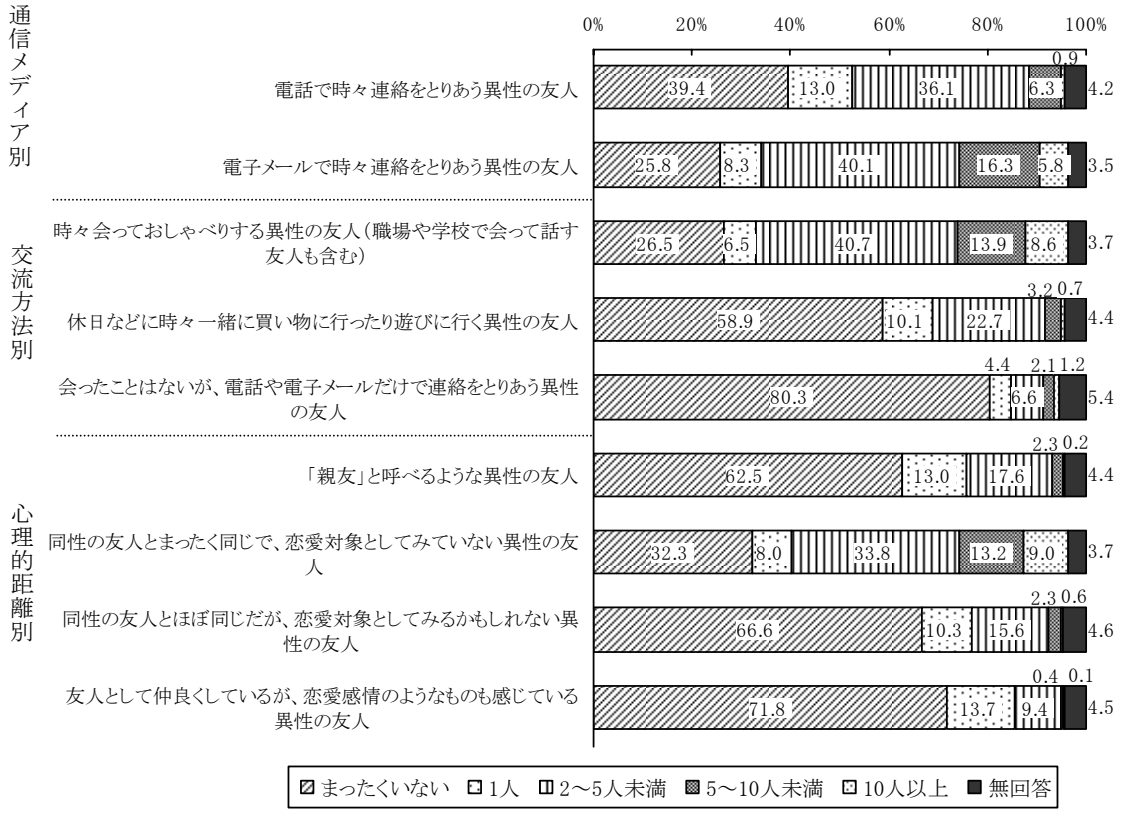
具体的にどのような異性の友人がどのくらいいるのかをみた（図表６）。通信メディア別にみると、「電話で時々連絡をとりあう異性の友人」では、「まったくいない」が39.4%となっているのに対し、「電子メールで時々連絡をとりあう異性の友人」では「まったくいない」とした人は25.8%だった。人数についても電話より電子メールの方が多く、特に「５人以上」（「５～10人未満」と「10人以上」の合計）についてみると、「電話」で7.2%であるのに対し、「電子メール」では22.1%となっていた。異性の友人が「まったくいない」とした割合は、他の項目と比べても「電子メールで時々連絡をとりあう異性の友人」において最も少なく、今日の青年層の４分の３程度は電子メールで連絡をとりあう異性の友人がいることがわかった。

一方、交流方法別についてたずねたものについてみると、「時々会っておしゃべりする異性の友人」については、「まったくいない」とした人が26.5%と少なかった。「休日に遊びに行く異性の友人」については、６割近くが「まったくいない」とし、「１人」が１割、「２～５人」が２割強いた。「会ったことはないが電話や電子メールで連絡を

とりあう異性の友人」については、８割以上が「まったくいない」とした。

また、心理的距離別では、「親友と呼べるような異性の友人」について６割強が「まったくいない」とし、「１人」が13.0％、「２～５人」が17.6％、「５人以上」が2.5％となった。「同性の友人とまったく同じで、恋愛対象としてみていない異性の友人」では、「２～５人」が33.8％で最多となっており、「まったくいない」と「無回答」を除くと、現代の青年層の64.0％に、恋愛対象の予備軍としてではなく、完全に恋愛対象から外れた「異性の友人」がいることになる。「同性の友人とほぼ同じだが、恋愛対象としてみるかもしれない異性の友人」や「友人として仲良くしているが、恋愛感情のようなものも感じている異性の友人」では、「まったくいない」とした人が多かった。

図表6　異性の友人の人数

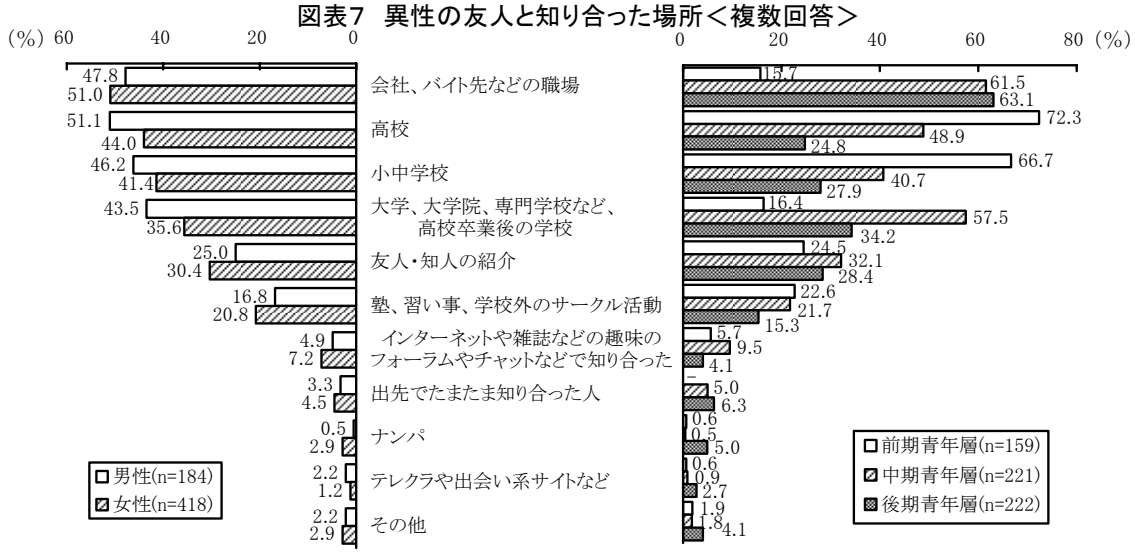


2）異性の友人と知り合った場所

「異性の友人はいない」という人を除いて、異性の友人と知り合った場所をあげてもらい、性・年齢層別に比較した（図表７）。性別では、女性において男性より「会社、バイト先などの職場」、「友人・知人の紹介」が若干多いのに対して、男性では「高校」や「小中学校」「大学、大学院、専門学校など、高校卒業後の学校」といった学校関係が多かった。年齢層別では、「会社、バイト先などの職場」で中期青年層・後期青年層が多かった。中期青年層では「大学、大学院、専門学校など、高校卒業後の学校」が

非常に多い。「高校」や「小中学校」については前期青年層が最多である。「恋人と知り合った場所」での結果と同様に、ここでも直近のライフステージが影響している。

図表7　異性の友人と知り合った場所＜複数回答＞



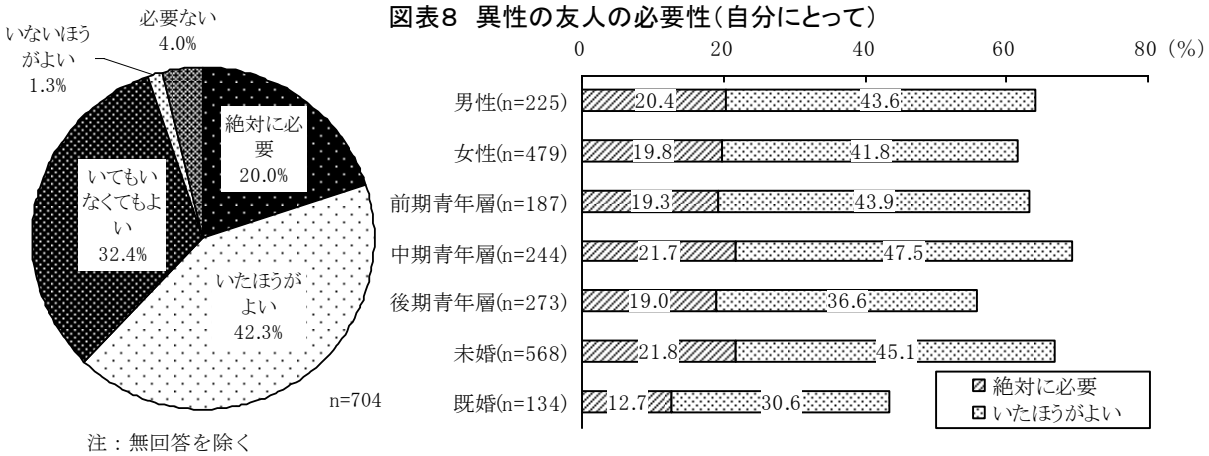
注：「異性の友人はいない」という人を除く

3）異性の友人の必要性（自分にとって）

自分にとって異性の友人が「絶対に必要」と考えている人は20.0%となっており、「いたほうがよい」と考えている人の42.3%を合わせると、62.3%が「必要」と考えている（図表８）。性・年齢層別にみると、中期青年層で最も「必要」（「絶対に必要」と「いたほうがよい」の合計、以下同じ）と考えている人が多く、69.2%を占めた。最も「必要」とした人が少なかったのは、既婚の多い後期青年層においてだった。

未既婚別にみると、未婚では「必要」とした人が66.9%であるのに対して、既婚では43.3%にとどまった。さらに、後期青年層だけで未既婚別に比較をしたところ、後期青年層の未婚では「必要」とした人が65.8%であったのに対し、既婚では41.9%で、

図表8　異性の友人の必要性（自分にとって）



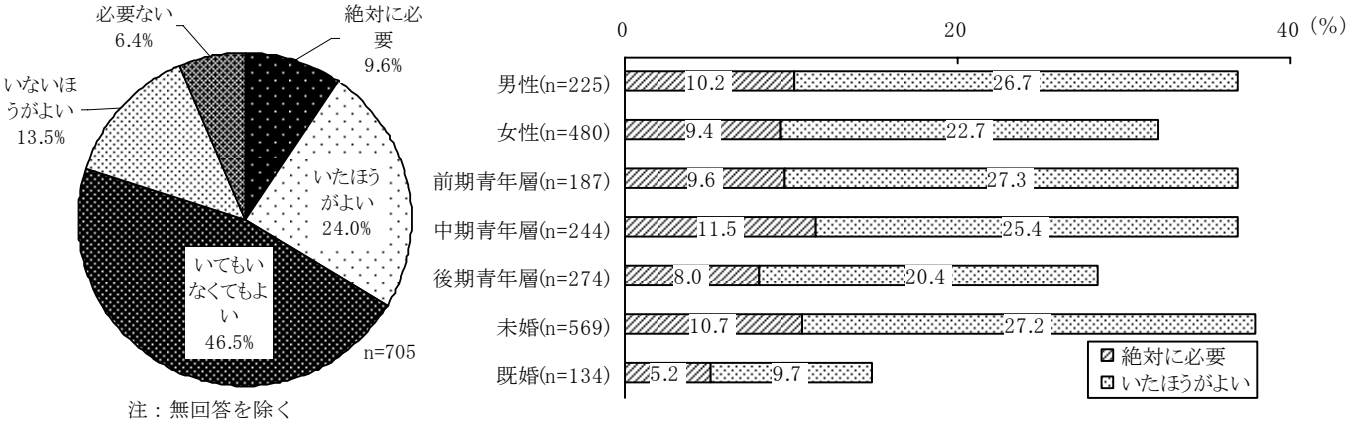
注：無回答を除く

既婚では「いてもいなくてもよい」という人が45.3%となっていた（図表省略）。また、後期青年層だけで恋人の有無別に比較をしたところ、「今、恋人がいる」人では63.8%が、「今は恋人がいないが以前はいた」という人では80.4%が「必要」としたのに対し、「恋人はずっといない」と答えた人では51.2%のみが「必要」と考えていることがわかった（図表省略）。恋人がずっといない人よりも、現在恋人がいる人の方で異性の友人が必要とされているのは興味深い結果である。

4）異性の友人の必要性（恋人や配偶者にとって）

一方、恋人や配偶者にとっての異性の友人についてみると、自分にとっての異性の友人では「いないほうがよい」という回答が1.3%（図表８）であったのに対し、恋人や配偶者の異性の友人だと13.5%が「いないほうがよい」と考えている（図表９）。年齢層別にみると、後期青年層で最も「必要」と考えている人が少なかった。未既婚別にみると、未婚では「必要」とした人が37.9%であるのに対し、既婚では14.9%にとどまった。後期青年層だけで未既婚別に比較をしたところ、未婚では「必要」とした人が37.8%であったのに対し、既婚では半分以下の15.4%だった（図表省略）。

図表9　異性の友人の必要性（恋人や配偶者にとって）



注：無回答を除く

3. おわりに

本稿では、「電子メールで時々連絡をとりあう異性の友人」が「まったくいない」とした人は少なく、青年層の４分の３程度に電子メールで連絡をとりあう異性の友人がいることが明らかになった。また、６割以上の青年層に恋愛対象外の「異性の友人」がいることや、既婚者でも75%に異性の友人がいることも明らかとなった。

今回言及しなかったが、本調査では異性との付き合いとメール利用との関係についても探っている（宮木 2007）。その結果、メールを利用することで「異性と出会ってから、親しくなるまでの時間が短くなった」「異性に対して、恥ずかしがらずにコミュ

ニケーションをとれるようになった」といった意見が多く、メールが異性間の関係構築を円滑にし、コミュニケーションを活性化させる点について指摘した。

学校や職場など、必然的に対面する頻度の高い異性とは友人関係を継続させやすいが、対面する必然性が失われると異性の友人にあえて「会う」ないし「話す」といった機会は大幅に減少する。電話や手紙によって特別な用事もなく「ふれあい」的なやりとりをすることは、異性の友人関係においては障壁が高い。しかしメールであれば気軽にコミュニケーションをとれるため、特別な用事やきっかけがなくてもやりとりができ、関係を継続させることができるのである。

自由回答でも、既婚者同士ないしどちらか一方が既婚者である場合、電話や手紙で異性の友人同士がコンタクトを取り合うことには抵抗があるが、メールであれば心理的抵抗が低いとの意見がみられた。一般に、結婚後は異性との付き合いが制約されがちだが、既婚者の４割が「異性の友人は必要」と考えており、75％が「異性の友人がいる」としている点をみると、現代の青年層はライフステージの変化によって友人関係を切り替えることが少なくなっているようだ。異性間でメールを使うことで関係構築・維持における“Ｓ・Ｏ・Ｓ”（Step up / Overlap / Secret）の効果がある点について冒頭で述べたが、ここでの「Overlap」は、特に「異性の友人関係」で大きく作用しているようである。

ただし、メールの普及は異性間の関係発展には大きく寄与しているが、出会いそのものの機会としては依存度が低い。実際、出会い系サイトの利用については本調査でも９割以上が「抵抗がある」と回答しており、世間で取り沙汰されるほど出会い系サイトが青年層に一般的なものではない点が明らかになっている。人間関係の発展においては、出会い→関係構築→関係維持の３ステップがあるが、現代の青年層の異性関係では、関係構築・維持は効率的になったものの、そこに至るまでの障壁はいまだに高いようである。

（研究開発室　副主任研究員）

【参考文献】

・宮木由貴子,2007,「青年層の異性付き合いにおける電子メール利用」『Life Design Report（2007年５－６月号)』第一生命経済研究所：16-27.

・宮木由貴子,2002,「青年層の通信メディアの選択と友人関係－音声コミュニケーションと文字コミュニケーション－」『Life Design Report（2002年４月号)』第一生命経済研究所：27-49.

・(財)こども未来財団,2004,「地方公共団体等における結婚支援に関する調査研究」

・経済産業省商務情報政策局サービス産業課,2006,「少子化時代の結婚関連産業のあり方に関する調査研究報告書」